

就学前の音楽教育に関する研究(2)

A Study on Music Education for Pre-School Children (2)

飯 泉 祐美子
Yumiko IIZUMI

1. はじめに一問題提起と本研究の目的
2. 研究方法
3. 文部省「幼稚園教育要領」領域「表現」の解釈
 - (1) 領域「表現」のねらいに関する諸氏の解釈…大場牧夫の見解
 - (2) 領域「表現」のねらいに関する諸氏の解釈…黒川建一の見解
4. 「表現」「表現活動」「音楽表現活動」に関する諸氏の見解
 - (1) 「表現」について
 - (2) 「表現活動」について
 - (3) 「音楽表現活動」について
5. 「表現」「表現活動」「音楽表現活動」の今後の展望
 - (1) 今後の展望
 - (2) 今後の可能性…音楽的早期教育カリキュラム“CURRICUM MUSIKALISCHE FRÜHERZIEHUNG”について
6. おわりに
7. 引用・参考文献

1. はじめに一問題提起と本研究の目的

問題提起

就学前の音楽教育に関する研究(1)において、「音素材」との出会いの時期である就学前段階が、「生涯教育としての音楽教育」において最も重要な時期だと考えた。そのため、「音楽を愛好する心情」「音楽に対する感性」「音楽活動の基礎的な能力」「豊かな情操」「ものごとに主体的に関わろうとする意欲」「生きる力」など、学校教育における最終目標をあらかじめ就学前に意識し、「今、幼児の活動をどのような方向に促す可能性があるのか?」「そのためにはどのような助言の可能性はあるのか?」等、幼稚園教師が「表現活動」を導き出すきっかけとして、幼稚園教育と小学校教育をスパイラルにとらえて考察を試み、スパイラル図を考案した。

然し、その際に、領域「表現」となってからの16年間を振り返ると、「音楽的な活動」を主な媒体とする「表現活動」の本質に、大きな変化があったかという問題が提起された。なぜなら、多くの幼稚園や保育所で行事として取り扱われている「生活発表会」「運動会」などを見るかぎり、「集団の美」としての達成感や、充実感を味わうことが出来る機会が多いように思われるが、本来の領域「表現」のねらいが実現されているのかと考えると疑問を感じるからである。保育現場において領域「表現」が正しく理解され受容され、子ども達の活動の中で実現されているのだろうか。この問題は、本質的な領域「表現」の理解のみの問題ではなく、少子化に伴う幼稚園や保育所の幼児の獲得競争の問題、また、家庭側の幼児期の表現活動に関する理解と受容など、さまざまなハードルがあることは承知のことである。然し、であるからこそ、今一度、領域「表現」のねらいを再認し、そのねらいを実現に近づけるための考察を試みたいと思う。

2. 研究方法

領域「表現」のねらいを再認するにあたり、主に「音楽的な表現活動」を中心としたものに的を絞りたいと思う。これは、スタンプポイントとしての「音楽的な表現活動」であり、決して他の表現活動と境界線を設けたものではない。

この点を踏まえて、文部省「幼稚園教育要領」における、領域「表現」の音楽的な側面の解釈を再認し、考察を試みる。

3. 文部省「幼稚園教育要領」領域「表現」の解釈

平成元年に文部省「幼稚園教育要領」は大幅に改訂された。それまでの音楽にかかわる領域「音楽リズム」は領域「表現」と改められた。このことについて荒木紫乃は、「領域の改訂が行わ

れた主な理由は日本の社会状況が大きく変化したことや乳幼児に関する研究の成果が数多く発表されその知見が子ども理解を深めたこと、また一部の園での行き過ぎた音楽や絵画指導への注意も込められている¹⁰⁾と書いている。

ここでは、このような背景により、誕生した領域「表現」について諸氏の見解より解釈を試みたいと思う。

(1) 領域「表現」のねらいに関する諸氏の見解…大場牧夫の見解

この領域の大きなねらいは、

- ・生活の周りの音楽的なもの、造形的なものなどさまざまなものの美しさに対して感じる心を育てる。
- ・音楽でも、造形でも、劇的活動でも、子どもの中にあるイメージが非常に重要な意味を持ち、イメージの豊かな心を育てる。
- ・さまざまに表現する事を、幼児が楽しく感じる事。

これらの3点が大きなねらいである、と述べている。

(2) 領域「表現」のねらいに関する諸氏の見解…黒川建一の見解

領域「表現」のねらいは

- ・知的な思考を伴った感性を育てる。
- ・さまざまな表現を受け取ることが大切にながら、かつ、自分なりの表現を楽しむ。
- ・想像をひろげるためのイメージを育てる。

これらの3点を大きなねらいであるといひ、さらに以下のように解説している。

「表現」のねらいの一つに、「豊かな感性を持つ」(中略)他の領域に比べて、「表現」では確かに感性とのかかわりが深くなる、と考えることもできますが、表現に知的な操作が不要なわけではありません。

知的な思考を伴った感性といったものによって、表現は成り立ちます。そのことを忘れて短絡的に表現と感性をつなげたり、感性に偏らせた表現の保育を考えることがないように注意しなければなりません。(中略)

「自分なりに表現して楽しむ」(中略)他の表現を「受け取ること」の大切さに留意したいと

思います。これまでの表現の保育は、表せ、表せだけでやってきて、相手の表現をきちっと受け止めることへの配慮が弱かったといえます。

ねらいの三つ目に関してはまず、「イメージ」の大事さを強調しておきたいと思います。幼児期は具体的な何かを手がかりにものを考える時期だとみなされています。イメージはそういう意味で幼児たちの成長にかけがえのない役割を持っています。そこから、さらに想像を広げる表現の保育が考えられることになるのです。(中略)

領域「表現」は、こうしたねらいを基本においています。それは同時に、保育の〈願い〉でもあるわけです^⑩。

これら両氏の見解をまとめると、生活の中でのさまざまなものの美しさに対して、知的な思考レベルで感じる心を育てること。具体的なものを手がかりに物事を考えるこの時期に、想像力をひろげるための「イメージ」の豊かな心を育てること。さまざまな表現(自分自身の表現や、自分とは異なる他者の表現)を幼児自身が楽しむ姿勢が育つこと、これらが文部省「幼稚園教育要領」における領域「表現」の大きなねらいといえるだろう。

4. 「表現」「表現活動」「音楽表現活動」に関する諸氏の見解

(1) 「表現」について

「表現」について黒川建一は次のように述べている。

表現は、自分の願いをかなえる営みです。表現することで思いが満たされます。その意味では、表現は自己実現の行為、自己充足の行為であるといえます。(中略)

幼児たちが表現するとき、結果的には、そういった自己にかかわる行為をしていることになります。それは自己を育てる活動をしていることです。

そして、それらの表現を交し合うことで、友達同士の関係をつくり、豊かにしていきます。自己と、他の自己とのかかわり合うなかで、さらに自己を育てていきます。そうしたことを保育者が援助していく、それが、表現の保育だろうと思います^⑪。

このように「表現」とは、自分の気持ちや心の中にあるものを自主的、主体的、自発的に外に出す行為であり、自己実現の行為である。その視点から考察すると「表現」とは個人的な活動だといえる。したがって個性の表われる活動ともいうことができ、創造的な活動ともいえるだろう。

つまり言い換えると、決められたとおりの表現をするという行為は「表現」の基本から外れてしまうことになる。

では、「表現すること」で何を育てるべきなのか。黒川はさらに次の3点を挙げている。

- ・表現への態度を育てること
- ・表現する内容の質を高めること
- ・表現の技能を育てること

自分の心の中で何かを感じていても、表現しようとする態度を育てていかなければ、他者に気持ちを伝えることができない。他者の表現の中身の質をくずさないで同じレベルでいねいに的確に読み取ることのできる力も育てるべきである。即ち、表現活動はコミュニケーションが大前提の活動であるといえるだろう。

(2) 「表現活動」について

「表現活動」について大場牧夫は次のように述べている。

これまで、往々にして、子ども自身の楽しさは無視され、叱咤激励されて、到達して初めてほめられるという状態がこの分野にはありました。しかし平成元年改訂の教育要領では、表現そのものを楽しむ姿勢が子どもの中に出来るかどうかというところにポイントをおいているといえます。(中略)

幼児というのは、もともとさまざまなものがさまざまに混じり合って表現しようとしていると思います。それを大人が教科教育的な方法論、領域論によって分けよう分けようとしてはいいないか。子どもは重なり合ったイメージややり方で自由に総合的な表現を、子どもなりにやっのけているのです。私達はそれに対応してこなかったのではないかということがあると思います。(中略)

自分を表現していく喜びなどが、どこから生まれ、どう変化し、どう育つかというおさえが非常に欠落しており、「やればできる」という発想で指導されてきたように思われます。

(中略)

重要な問題として、従来は、表現というものは本来子どもの自発的なもの、主体的な活動であるはずですが、これが意外に無視されてきたことが多かったと思います。平成元年の改訂では子どもの自発性、主体性、一人一人の特性、などを大事にしているのですが、その主体的活動における子どもの自己表現する自由性の獲得ということもこうした視点で捉え直す必要があるのではないかと思います⁹⁾。

拙者自身、今から約30年前現役の幼稚園児として運動会で鼓笛隊(小太鼓を担当)発表会では

大編成のリード合奏音楽隊を経験した。当時どちらのパフォーマンスも周辺の幼稚園や保育所ではまだ取り組まれておらず、いわば、行事の花形であった。メンバーはオーディションで選出され「やればできる」という発想のもと、指導を受けた。

30年余り過ぎた現在、その当時を振り返ってみると、レギュラーメンバーからはずされないために厳しい練習に耐え、その結果、最終的にレギュラーメンバーからはずされなかったという喜びや、その意味での満足感は多少心に残っているが、演奏をした喜びや達成感を思い出すことができない。本来の意味での充実感や達成感は記憶に残っていないのである。

この経験について小林美実も以下に同様の指摘をしている。

(3)「音楽表現活動」について

では、幼児期の望ましい音楽表現とはどうあるべきか。小林美実は豊かな音楽的表現について次のように述べている。

子どもの発達のそれぞれの段階における表現は、結果的には大人のそれと比べれば幼稚、しかし音楽的内容は乏しいものではないのです。

子どもが生き生きと歌ったり動いたりしているとき、それは大人の踊りや演奏に比べれば外見は貧弱かもしれませんが、子どもの内面では、大人の型通りの表現よりはるかに豊かに、柔軟性をもって表現しようとしているといえると思います。そのようなときの子どもの意欲と充実感、満足感というのが大切なのです。

また、子どもというものは、環境の中にあるさまざまな情報を（中略）起爆剤として、真似たり、新しいイメージをひろげて新たな活動に発展させていくことをしています。こうした内面での活発な活動は、大人よりも素晴らしいと思います。（中略）

子どもの表現の基本は、音楽の分野では歌が中心となりますが、イメージを持ち体を動かし、表情を豊かに歌うのを見ると、そこにドラマ的な要素までも含めて表現していることが分かります。それはまず、体の動きと、素朴に音を出すことから始まり、そこに言葉が加わって歌となり、そして道具が入ると楽器というように音楽表現がひろがっていきます。（中略）

子どもが楽しそうに歌っているときは、子どもが自分から歌わなくていられなくなっているときです。そのとき、子どもの頭の中はイメージでいっぱいになっています。何かに同化したり、あるものになったつもりでいます。それを表現したいと思って、たまたま声や言葉を出し歌になっているのです。多くの場合、こういうときの子どもの歌はでたらめなことが多いけれども、生き生きと歌っています。例えばテレビに出る歌手のまねをすることも何かになって歌うという特徴の表れの一つだと思います。

子どもの歌のきっかけは、幾つかありますが、その一つに体を動かすことと一緒にということ

があります。動きにつられて声を発することが最初に見られます。(中略)しかし、十分に歌えないため、体を動かすことで、イメージを補っているのです⁹⁾。

このように、内面から湧き出てきたものが、豊かな音楽的な表現につながっていくのであって、はじめから、表現する内容を教え込まれるものではないことがわかる。したがって、きちんと起立し集団で歌わせたり、また、ピアノにあわせて歌わせようとすることは、体の自由を奪い、自分の声で歌おう、全身で歌の楽しさを表そうとする自発性を抑えてしまうことになるだろう。器楽も同様、いい音だな、きれいな音だな、面白い音だな、自分もその音で何かしてみようかな、その音は何みたいな音かな、などさまざまにイメージを持って、音を探し、試しながら音で遊ぶことが、豊かな音楽的表現につながる最初の一步であろう。

この点について、小林は、時にはごっこ遊びの気分も必要であると補足している。

5. 「表現」「表現活動」「音楽表現活動」の今後の展望

(1) 今後の展望

これまでの大場、小林、黒川3者の見解から考察すると、「音楽的な表現活動」の根底には子どもたちの「生き生きとした活動」があり、それが、「表現活動」の出発点といえるだろう。そこから子ども達が主体的に楽しんだり、喜びを感じながら、自分の体や身の回りの音を使って音の表現、音楽の表現をしていくことが本来の「表現活動」の姿ではなかろうか。その段階を経た上での更なる子どもたちの「表現活動」はきっと満足感や、充実感をともなうことができるのではなかろうか。

これまでの保育現場で用いられてきた「音楽的な表現活動」に関する教材や教具ではこれらの活動を実現できるものは、非常に少なく感じられる。早急に研究する必要があると思われる。

そこで、旧西ドイツ時代に研究され開発された音楽的早期教育カリキュラム“CURRICURM MUSIKALISCHE FRÜHERZIEHUNG”にその可能性が秘められていると考え、提供したいと思う。

(2) 今後の可能性…音楽的早期教育カリキュラム“CURRICURM MUSIKALISCHE FRÜHERZIEHUNG”について

“CURRICURM MUSIKALISCHE FRÜHERZIEHUNG”は旧西ドイツ時代に公的な学校における就学前の子ども(4～5歳児)を対象として研究されたカリキュラムであり全68プログラムを2年かけて実施する。このカリキュラムは1967年に初版がだされ、その後数年周期でさまざまなデータをもとに改訂が加えられて今日に至っている。

カリキュラムの基本的理念は以下の3点である。

- (1)個々の発達段階に応じた美的感覚の育成
- (2)創造的な音楽的教育
- (3)生涯教育との連携

これらの3つの理念は文部省「幼稚園教育要領」領域「表現」のねらいと類似する点が多く、学ぶべき点が多いと思われる。また、ほぼすべてのプログラムに大場、小林、黒川がいう「表現」のねらいを実現するためのヒントになるようなプログラムが組み込まれている。

以下はヒントになるであろうプログラムをピックアップしたものである。

〈ピックアップカリキュラム〉^⑥

初めての教室の空間体験	動物の鳴き声の模倣
備品楽器による初体験	道路交通の音の聴取と表現
物音の聴取と表現	変奏をつくって表現
楽器遊び	駅の音の聴取と表現
声による表現の可能性	スピードの表現
異なった楽器の音による聴取と表現	強弱の表現
水の音の聴取と表現	環境の音や響きの聴取と表現
丸い輪の形をしたものによる遊び	いろいろな声の表現（ハミング、囁き声等）
スタッカートとレガートの表現	ダイナミクスの表現
表現された道具と模倣した音の関係	密集した響き、高音の響きの聴取と表現
紐を用いた演奏	厚みのある響きの聴取と表現
カッコウの模倣	消防車、救急車、パトカーの表現
紐を用いて遊ぶ	グリッサンドの表現
小鳥の鳴き声の聴取と表現	童話の表現
身体表現	操り人形の表現
呼びかけ遊び	簡易楽器による即興表現
言葉によるリズム遊び	雷の表現
風船の飛んでいく様子を表現	霧の表現
パントマイム	アッチェレランドとリタルダンドの聴取と表現
身近にある音を発するものについて	電氣的な音の聴取と表現
電子楽器の響きをグラフィックな図であらわす	オスティナートの表現

6. おわりに

本研究は黒川建一、小林美実、大場牧夫らの見解を中心に幼児教育における「音楽的な表現」のあるべき姿を探ってきた。

3者の見解から考察すると、「音楽的な表現活動」の根底には子どもたちの「生き生きとした活動」が前提であり、そこから子ども達が主体的に楽しんだり、喜びを感じながら、自分の身体や身の回りの音を使って、音の表現、音楽の表現をしていき、そのプロセスを経た上での「表現活動」が、満足感や、充実感をともなうことができる本当の意味での「音楽的な表現活動」であるとされた。

然し、現段階では効率よく実施、実現できる教材、教具は、非常に少なく、早急に研究する必要があると指摘し、基本的理念が類似している旧西ドイツ時代に研究され開発された音楽的早期教育カリキュラム“CURRICULUM MUSIKALISCHE FRÜHERZIEHUNG”にその可能性があるのではないかと結論に至った。

今後はこのカリキュラムから我が国の幼児教育における適用について考察していきたい。

7. 引用・参考文献

〈引用文献〉

- (1) 荒井紫乃『音・音楽の表現力を探る 保育園・幼稚園から小学校へ』2003年6月 文化書房博文社 p.24
- (2) 黒川建一「表現の基本とは」『〈平成10年改訂〉幼稚園教育要領解説』1999年5月 フレーベル館 pp.156-157
- (3) 黒川建一「表現の基本とは」『〈平成10年改訂〉幼稚園教育要領解説』1999年5月 フレーベル館 p.156
- (4) 大場牧夫「領域表現の観点とねらい」『〈平成10年改訂〉幼稚園教育要領解説』1999年5月 フレーベル館 pp.153-154
- (5) 小林美実「音楽的な表現について」『〈平成10年改訂〉幼稚園教育要領解説』1999年5月 フレーベル館 pp.160-162
- (6) CURRICULUM MUSIKALISCHE FRÜHERZIEHUNG: Unterrichtsprogramm Musikschulfassung 1. Halbjahr — 4. Halbjahr Gustav Bosse Verlag Regensburg 1975.

〈参考文献〉

- ・大場牧夫「領域表現の観点とねらい」『〈平成10年改訂〉幼稚園教育要領解説』1999年5月 フレーベル館

- ・黒川建一「表現の基本とは」『〈平成10年改訂〉幼稚園教育要領解説』1999年5月 フレーベル館
- ・小林美実「音楽的な表現について」『〈平成10年改訂〉幼稚園教育要領解説』1999年5月 フレーベル館
- ・齋藤（飯泉）祐美子『「音楽受容活動」と「音楽表現活動」の統合を目指した幼児音楽教育—旧西ドイツの音楽早期教育カリキュラム“CURRICULUM MUSIKALISCHE FRÜHERZIEHUNG”の分析を通して—』武蔵野音楽大学大学院修士論文 1992年2月